

Language Campに向けての日本語教育の取り組み

Teaching Japanese to Gonzaga University Students at the Language Camp

藤原 雅 憲

Masanori FUJIWARA

1. 背景

2007年夏、アメリカ・ワシントン州にあるゴンザガ大学（TESOL専攻）から金城学院大学文学部言語文化学科に、大学院生による英語教育実習が可能かどうかという打診があった。条件は、2月または3月にかけて集中で実習が行えること、英語教育実習とともに日本語が学習できること、の2点であった。

学科で協議した結果、英語教育実習には、同学科のカリキュラムにある「イングリッシュ・コミュニケーションE」と「同F」を当てること、日本語の指導には、「日本語教育実習（国内）」を当てることを決定した。また、この二つの双方向教育プログラムをLanguage Campと呼ぶことも決めた。

2008年秋、第1回目のLanguage Campの日程が確定した。全体のスケジュールは次の通りである。

2009年2月9日（月）～2月27日（金）の、土・日・祝を除く14日間。英語教育実習は、2時限目と3時限目に、日本語教育実習は4時限目に行われる。

なお、「日本語教育実習（国内）」は、3、4年生対象の科目で、日本語教育コースに所属する言語文化学科および日本語日本文化学

科の学生が担当する。

2. 日本語教育実習（国内）の対応策

「日本語教育実習（国内）」という科目が開設されたのは2004年度である。以降、試行錯誤を重ねながら現在に至っている。初年度は夏季期間中に行われ、名古屋大学短期留学生であるインドネシア人1名を対象に実習を行った。2年目も夏季期間中に実施し、今度は本学の交換留学生である韓国人を対象とした。3年目と4年目は後期の5時限目を利用して実習を行った。対象は、本学の交換留学生である欧米圏からの学生であった。いずれも日本語のレベルが中級程度の学習者に向けての実習であった。

その際に使用した主教材はまちまちで、1年目は、実習に参加した日本人学生が作成した読解教材を用いた。新聞記事とその関連資料および単語表からなるものだった。2年目以降は市販の教材で、『Talking business in Japanese』（Japan Times 1991）や『現代日本語コース中級』（名古屋大学出版会 1988）などを使用した。

今回のLanguage Campはこれまでとは事情が異なる。その一つは、日本語未習の学

習者を対象とする点である。二つ目は、アメリカ人が日本で短期間に学習することを目的とした教科書が存在しない点である。旅行者用の日本語会話集はもちろん市販されているが、それを教室用のテキストとして用いることはできない。

これら二つの点を解決するためには、Language Camp のための教科書を開発する外ないと考えた。そこで以下では、新教科書作成の構想を述べることにする。

3. 既成の日本語教科書が持つ弱点

日本語未習者を対象とした日本語教科書は多数、市販されている。『日本語教材リスト2007~2008』(凡人社 2007)によると100を超えている。それらの一つを使うことが何故できないのか。それを具体的に示す。

世界で一番よく使われている初級教科書は『みんなの日本語』(スリーエーネットワーク 1998)である。その理由はいくつかあるだろうが、ここでは二つ取り上げる。一つは各国語版が充実していることである。英語、中国語、韓国語など10カ国語による翻訳・文法解説書がある。二つ目は副教材の充実である。文型練習帳、漢字練習帳、絵教材など。さらに、教え方の手引きも出版されている

にもかかわらず、この教科書を使わないのには十分な理由がある。

3.1. 緊急性の欠如

次の会話は第1課に収録されている。

佐藤：おはようございます。

山田：おはようございます。佐藤さん、こちらはマイク・ミラーさんです。

ミラー：初めまして。マイク・ミラーです。アメリカから来ました。どうぞよろしく。

佐藤：佐藤けい子です。どうぞよろ

しく。

Language Camp に参加するアメリカ人学生は、3週間しか日本に滞在しない。その間に日本語を学び、現実場面日本語を運用しなければならない。このように目的が明確な学習者にとっては、上のような会話は緊急性に乏しいものである。むしろ、長い時間をかけて日本語を習得したい学習者に向いているものといえる。

3週間程度の滞りで「紹介」を日本語で行う必要度は低い。英語で済ませられるからである。第1課の会話は、「～は～です」や「～から来ました」のような文法に隷属したものであり、文法を、時間をかけて積み上げていく方式ならではのものである。このような方式が学習者の目的と合致しないことは明らかである。

3.2. 現実場面の回避—想定会話の危うさ— 次の会話は第3話に収録されている。

マリア：すみません。そのワインを見せてください。

店員B：はい、どうぞ。

マリア：これはフランスのワインですか。

店員B：いいえ、イタリアのです。

マリア：いくらですか。

店員B：2,500円です。

マリア：じゃ、これをください。

この会話の作者は、これが現実に現れる会話であると考えたのだろうか。そうではないだろう。おそらく想定会話なのだろうが、進行の仕方が安直すぎはしないだろうか。「このワイン」かはボトルのラベルを見ればわかるものだ。また、「イタリアのもので2,500円だったら買う」ということが理解しにくい。さらに、会話が一直線に流れすぎている。

次はコンビニのレジで交わされる会話である。そこでアルバイトをしている本学在籍の

3年生の日本人学生が作成したものである。

P: いらっしゃいませ。

Q: (沈黙)

P: 120円の商品が2点, 147円の商品が1点, 合計3点で387円でございます。

Q: (お金を渡す)

P: 5,000円からお預かりします。大きい方が4,000円で, 残りが613円のお返しになります。レシートはどうなさいますか。

Q: (レシートを受け取る)

P: お印でよろしいでしょうか。

Q: はい。

これは実際に起こりうる会話であると感じられる。目の前で現実が進行しているように感じ取ることができる。これら二つの会話は状況が異なっているが, 会話の作者が想定するよう会話は現実の会話とはずいぶん差があるようである。日本語の教室で想定会話を学習した人は, 現実の会話場面にに対応できないのではないか。ここに, 現実場面を回避した教材の問題点が存在する。

4. 教科書が備える条件

筆者はこれまで2度, 教科書の作成に参加したことがある。1度目は1982年頃で, 初級教科書を作成した。2度目は1987年頃で, 中級教科書を作成した。以下にその摘要を述べる。

4.1. *A Course in Modern Japanese* (以下, CMJと略す) の場合

1982年当時に刊行されていた初級日本語教科書は数えるほどであった。それらは二つの種類に分けられる。一つは, 長沼メソッドと呼ばれる伝統的なタイプのもので, 主として国内で作成されていた。もう一つは, アメリカやオーストラリアで作成されたもので, オー

ディオリング方式によるものであった。ここでは, 国内の代表的な教科書である『標準日本語読本』初級篇に触れておく。以下はその『巻一』の1課である。

いち (一)

これはほんです。これはかみです。これはえんぴつです。

これはいすですか。はい, そうです。

これもいすですか。はい, そうです。

それもいすですか。いいえ, そうじゃありません。

では, それはなんですか。つくえです。

(後略)

長沼メソッドは直接教授法を採用し, 文型を積み上げていくという構造シラバスを指導の中核として, 教室では日本語だけを用いる方式をとった。信奉する教授法を活かそうとしたもので, 学習者のニーズを考慮するなどの観点は, 時代的な制約があって, ほとんど顧みられなかった。

次は海外技術者研修協会の『日本語の基礎』を取り上げる。

<第6課会話>

コルテス: きのう何をしましたか。

スラメット: 朝, 日本語を勉強しました。午後, 友達と銀座へ行きました。

コルテス: ここから銀座までどの位かかりますか。

スラメット: タクシーで30分です。

コルテス: そうですか。銀座で何をしましたか。

スラメット: デパートでこのカメラを買いました。

この会話は, 導入すべき文型を盛り込もうとした結果生まれたものであろう。「会話」と言ったが, これが会話なのだろうか, という疑問が湧いてくる。コルテスさんは取調官

のように矢継ぎ早に質問を浴びせる。スメラットさんは純真にも、聞かれもしないことまで答えてしまう。これは会話だとは思わないほうがいだろう。ドリルで培った文型能力を、会話らしき問答の中で確認・強化したまでのことである。

現場の迫真性が欠如しているのではないか。このことが上の2種類の教科書に当てはまると考える。教科書が備える条件とは何か。それは、学習者の学習動機、できるようになりたい技能、到達したいレベルなどを満たしているものではなからうか。一言で言えば、学習目的に合致した教科書こそが必要不可欠ではないだろうか。

しばしば、汎用性を備えた教科書、ということが言われる。どのような教育機関でも、どのような学習者にも使える教科書というようなものが存在するという仮定に立った言い方であるが、そのような仮定を捨て去ったほうがいい。ビジネスマン、技術研修生、留学生に望ましいテキストは自ずから異なっているはずである。何故なら、学ぶべき内容のかなりの部分がお互いに違っているからである。

以上のような反省に立って、筆者がかつて

属していた機関では、日本で初めて留学生のための初級日本語教科書を作成した。作成の経緯は、藤原(2007)に詳しく記した。ここでは、現場緊急性を考慮した点について述べる。

現場緊急性とは何か。来日した直後の留学生が日常生活の中で、日本語を用いて対処しなければならないことは何か、ということである。「食べなければならない」、「動詞がなければどうしようもない」というような雑談を交わしながら、留学生にとっての喫緊の場面を洗い出した。それが下のような場面シラバスとなって結実した。

さきほど、「日本で初めて」と言ったが、食堂の会話を第1課で扱った教科書は皆無だったし、体調の説明や、銀行の会話、図書館での会話も初めての試みだった。

このシラバスを、利用した留学生は喜んで受け入れてくれた。留学生の一人は、教科書の会話文を覚えておけば、実際の会話に不自由しないと話していた。教科書に備わるべき条件の一つを提供できたことが大きかったのであろう。

課名	主たる文法項目	場面
Lesson 1:	単文一動詞文、格助詞、「は」、丁寧文、疑問文	食堂で
Lesson 2:	名詞文、N1のN2、指示語「こ/そ/あ/ど・れ/の」	大学で紹介する
Lesson 3:	形容詞文	状況や体調を説明する
Lesson 4:	存在文、所在文	人や物の存在を説明する
Lesson 5:	格助詞の様々な用法	交通機関に乗る
Lesson 6:	復習	スーパーで買い物をする
Lesson 7:	欲求文、-て形+ください	銀行を利用する
Lesson 8:	-て形による文接続	郵便局を利用する
Lesson 9:	引用文と「と」	病状を説明する
Lesson10:	許可・義務・禁止の表現	奨学金をもらいに行く
Lesson11:	名詞修飾節	図書館を利用する
Lesson12:	復習	遠方まで行く

4.2. 『現代日本語コース中級』(以下、『中級』と略す)の場合

これは、CMJを修了した留学生が次の段階で学ぶべき日本語を模索した結果生まれた教科書である。

二つのことを考えた。一つは口頭表現能力の養成であった。CMJで確かに初級文法などを勉強した。だが、それが高度な運用力にまで高まっていない。その能力を高めるためには機能シラバスが有効ではないか。機能シラバスを用いれば、学習者がある言語行動を実現するのにどのような言語形式と談話展開を用いればよいかを理解し、それを実践していくことができるだろう。そのように考えて、「頼む」、「誘う・受ける」、「誘う・断る」、「ことづける」、「意見を述べる」などの機能面から日本語を再分類した。

次は『中級』第5課の会話文である。

<会話1 事務室>

バンバン：あのう、すみません。こちらに佐々木いらっしゃいませんか。

事務の人：今いらっしゃいませんが。

バンバン：あ、そうですか。あのう、じつは、きょう4時からのゼミにわたしも出るように言われていたんですが。

事務の人：はあ。

バンバン：急に用事ができて、出られなくなりましたので、失礼するとお伝えいただきましたんですが。

事務の人：はい。ゼミに欠席するということですね。

バンバン：はい。

事務の人：わかりました。お伝えします。

バンバン：お願いします。失礼します。

上の会話文に出てくる文法、語、表現、敬語などは、すでに初級段階で習得しているは

ずのものである。少なくとも記憶されている項目である。これらを実際の場面で運用できる能力を兼ね備えることが大切である。会話の中で「バンバンさん」が行おうとしている行動は「ことづける」ということである。これを達成するためには、会話の進行に関する知識を前提として、「じつは、……が、……」なので、失礼するとお伝えいただきたいんですが」という連文形式および終止の形式を実行しなければならない。ここに機能シラバスを取り入れた有効性が存在する。

さらに、見知らぬ人には「お伝えいただきたいんですが」という結びをしたが、友人に対しては「……って言っといて」に変化するという事実気づかせ、それを実行させることで、いわゆる社会言語学的運用力の獲得に繋げることができる。また、「ことづけ」を受け取った側(上の会話では「事務の人」)は、「ことづけ」の内容を要約するという高度な言語行動が求められる。学習者は上の会話文から、「会話を開始する」→「ことづける」→「要約する」→「会話を終結させる」という4段階にわたる言語機能を学ぶことになるのである。こうして口頭表現能力を高めることが可能になるのである。

『中級』作成前に考えた二つのことは聴解能力の養成である。この分野はそれまで(あるいは現在も)見過ごされがちで、教科書に取り上げたものは、Mizutani (1977) とCMJくらいで、他の教科書には聴解と呼べるものはなかった。

日本で日本語教育をおこなう場合、聴解力の養成は必須の指導であると筆者は考えている。外国での教育ならば、まず文法や語彙、文字を教えてから聴解に取り組んでも遅くないと考えても間違いなからう。しかし、国内では日本語の渦が巻いており、日本語の教室を出ると周りは日本語一色である。ここで考

えなければならないのは、「話すとか書く」という行為に対し、読み、聞く内容を選択することができない。つまり、これこれの文法・表現・語彙だけで構成されている内容を聞かせてくださいという要求は、教室の外では通用しない。情報は、学習者が習得している事項とは関係なく発せられ、耳に入ってくる」ということである。「それをいかに処理し、どのようにして必要な情報を獲得していくか」という技術力の養成が中級段階の課題と考え」(『中級』p.vi.)のわけである。

しばしば日本語学習者から不満が漏れることがある。教室内の日本語は、聞いてもよく理解できるのに、外の日本語はほとんど理解できません、と。これは何を物語っているのだろうか。一つは、すでに触れた想定会話が現実を反映していないということだろう。もう一つは、教室の中では音声のスピードや音質の点で人工的に作ったものを扱っているということである。人工的な音声に慣れた学習者が、街の自然な音声に付いていけないという状況に置かれていると考えることができる。

このような学習者の不利を見過ごしてはならない。自然な音声に慣れるよう教室で訓練を行う必要がある。これは日本語教員の義務であろう。

『中級』では、以上の考え方に従って、留学生や研究室の教員や院生に聞き取り調査を行い、その結果に基づいて聴解内容を作成した。

「聞く練習は、A、B、Cの3種類のものを作成した。Aは不特定多数の聞き手を対象としたもので、駅やバスの案内放送、大学の講義、ラジオ番組などを選んだ。Bは、外国人である学習者が参加して、日本人に質問したり説明を聞いたりしている会話である。例えば、病院の受付や歯医者でのやりとりなど。Cは、日本人同士の会話を外国人である学習

者がそばで聞いている場面を取り上げた。会話の話題は大学生生活という視点から選んだ。」(同上)

『中級』を使って聴解を学んだ学習者は、始めは難しいという印象を持ったようだが、音声のスピードに慣れるにつれて聞く内容の面白さに惹かれていき、長い談話であっても処理できるような能力を獲得した。こうして所期の目標に到達することが可能になったのである。

5. 新教科書の工夫

5.1. ローマ字による表記

日本語未習者に対してどのような表記を用いるかは、初級段階における問題点の一つである。さまざまな学習者が存在する。中には文字を解さない人もいる。それゆえ、唯一の指導法というものはないと考えたほうがいだろう。

しかしながら、多くの機関で採られているのは、まずローマ字を使って音韻の基本となる拍を導入し、その後平仮名を少しずつ教えていくというやり方であろう。Language Campにおいてもほぼ同様である。ただ、第1課以降に示される日本文は、読解活動以外ではローマ字を用いることを基本とした。

では、どの方式のローマ字を用いるのがいだろうか。利用できるのは訓令式かヘボン式である。訓令式には次のような利点がある。一つは、サ行・タ行・ハ行がそれぞれ同じ子音字で表すことである。タ行は、ta, ti, tu, te, toと表記される。このことは、五段活用動詞の活用を学ぶ際に力を発揮する。「待つ」を例にとると、「mata/nai, mati/masu, matu, mate/ba」となり、一貫して-t-が使われている。もう一つは、拗音の表記が一定していることである。その基本は「子音字+y+母音字/a//u//o/」である。「ちゃ」は

「tja」であって、「cha」とは書かない。「じゃ」も「ja」ではなく「zya」である。

このような利点があるにもかかわらず、訓令式を採用せずに修正を加えたヘボン式を採用することにした。理由は二つある。一つは、ヘボン式のほうが日本語音声を比較的忠実に表していると考えられるからである。例えば「つ」はヘボン式では「tsu」と表記する。「つ」の語頭子音は、無声・歯茎・破擦音であり、その音をIPA (国際音声字母) では [ts] で表す。それゆえに、「tu」よりも「tsu」のほうが相応しいと考えることができる。二つ目の理由は、外来語の侵入によって、「ti」と「chi」、そして「tu」と「tsu」が区別されるようになってきたことである。英語の「tea」は日本語で「ティー」と表記され、[ti:] と発音されている。一方、[tɕi:] と発音される語は「地位」とみなされる。この例から明らかかなように、「ti」という拍は日本語として認知されており、「ti」と「chi」は対立をなす関係にあることがわかる。

以上の二つの理由からヘボン式を採ったのであるが、この方式に若干の変更を加えたものを修正ヘボン式と呼び、この方式で教科書の日本語を表すことにした。修正部分は二つある。一つは長母音の表記である。修正式では母音字を重ねることとする。(例)「空想」→「kuusoo」, 「生計」→「seekee」, 「黄色」→「kiiro」, 「お母さん」→「okaasan」, など。二つ目は撥音の表記で、両唇音の前に現れる時にも「-m-」を使わず「-n-」を使うことにした。軟口蓋音の前の撥音は通常、[ŋ] で発音されるが、ヘボン式では「-n-」で表しており、一貫性がないと考えたからである。

ローマ字で文を表すときに大切なのは分かち書きである。その原則は、単語毎に区切ることである。(例)「窓から海が見えます」→「Mado kara umi ga miemasu」, 「おいし

くないと思っています」→「Oishiku nai to omotte imasu」。

分かち書きを正確に行うことは学習者にも日本語教員にも重要なことである。分かち書きされたローマ字文によって、両者の文法意識が共有されることになるからである。Jordan (1988) は、理由を表す「から」と「ので」を比較する説明の中で次のように述べている。

We sometimes encounter 'node' written as a single word and treated as if it were a particle like *kara*, but this is misleading: (1) it misses the identification of *no de* with the extended predicate pattern, which helps in its interpretation; and (2) it ignores the important fact that *da* before *no de* occurs as *na*, a form which occurs *only before nominals*.

(p.19. イタリックおよびゴチックは著者)

このように、分かち書きされた一語一語に対して、十分な文法的根拠を示さねばならないのである。

次は、新教科書に掲載された簡単な会話文のローマ字版である。

(A) P : Eego, hanashimasu ka?

Q : I(i)e, wakarimasen.

(B) P : Anoo, chotto sumimasen.

Q : Hai. Nan desu ka.

5.2. 文法について

A. 格助詞導入の工夫

ここでは格助詞導入に関する二つの立場を検討し、本教科書の方針を決定する。

CMJでは、第1課で以下のように導入した。

The following are examples of typical Japanese sentences.

Examples 1. Arisu san ga ikimasu.

2. Ame ga furimasu.

3. Ruin san ga hon o yomimasu.
4. Arisu san ga teepu o kikimasu.
5. Ruin san ga Arisu san o sensee ni shookai shimasu.

From the five examples above, you may draw some conclusions. They are:

1. All these sentences end with a word ending in -masu. All of these are verbs.
2. All verbs are preceded by at least two words(Examples 1 and 2), Arisu san, Ame and ga. Arisu san, Ame, etc. are nouns and ga is a particle. As you can see, nouns are followed by a particle. This applies to hon o in Example 3, teepu o in Example 4, Arisu san o and sensee ni in Examples 5. These units will be called a noun phrase in this textbook.

述語である動詞に先行して名詞句が現れ、それが、名詞+助詞から成るとする。その上で、格助詞「が」「を」「に」の用法を述べるという順序をとる。

この後、第6課で、「あのう、サンダルありますか」という発話をあえて登場させ、助詞が脱落する現象に気付かせる。この現象について次のような説明を与えた。

When speaking informally, the particles wa, ga, o, and ni are often omitted.

Omission of these particles results in a subtle change of meaning. You are advised not to omit any particles while you are trying to learn to speak Japanese.

- Examples
1. Kore (wa) ikura desu ka.
 2. Sono shatsu (wa) momen

desu ka.

3. Watashi (ga) ikimasu yo.
4. Kore (o) kaimashita.

つまり、CMJではまず、格助詞の存在に着目させる。しかる後に、話し言葉で頻出する助詞の省略という現象に踏み込んでいくわけである。

次に、CMJとは異なる立場を取る Jordan (1987)を見ていこう。

第1課でまず、動詞句を導入する。

J : Wakarimasu ka.

N : Ee, wakarimasu.

J : Kyoo simasu ne.

N : Iya, tigaimasu. Asita simasu yo.

上の会話ではまず、名詞(句)のない、動詞だけからなる発話のやりとりを行う。次いで、相対的な時間を表す名詞「今日」と「明日」は格助詞「に」を伴わないので、裸のまま動詞の前に置き、日本語では名詞は動詞に先行する現象に、さりげなく触れておく。このような伏線を張った後で、第4課において主格名詞や対格名詞を導入する。

<第4課>

J : Sore, nan desu ka.

N : Kore desu ka. Hurosiki desu yo.

J : Tenisu simasu ka.

N : Ie, tenisu wa simasen.

J : Kyoo wa dare desu ka.

N : Tanaka-san ga kimasu yo.

会話の順序に工夫が見られる。「それ、何ですか」と助詞を使わない発話を示す。次の会話では、「テニスしますか」と助詞のない疑問文を提示し、「テニスはしません」と、係助詞「は」を用いた発話で応答する。

このような、助詞を用いた発話に対して著者は、「I went to X/from X/with X/by

X」のような英語の前置詞の違いが、日本語の句助詞 (phrase particles) によって表されるとしている。「は」「が」の違いは次のように説明される。

「X+は」という句では、Xに「馴染みのある項目」を置き、句の後に続くコメント部がXに適用できるような述べ方をしていると説明している。

「X+が」という句では、Xを「コメント部にある動詞が表す動作の主」とし、聞き手に馴染みのない項目が該当しているという述べ方をしていると説明している。

以上のように、Jordan(1987)では、係助詞や格助詞の導入順序にきめ細かい工夫が見られる。日本語の話し言葉ではしばしば、助詞を伴わない裸の名詞が現れることが多い。この現象に忠実であろうとすれば、上のような記述が望まれるだろう。

本教科書も、Jordan (1987) を踏襲して助詞を導入する立場を取りたいと考える。

B. 「は」の導入

何かと問題の多い文法項目である。明治時代以降、多くの論考が示されているが、日本語教育では、「は」の導入に関する合意はない。

Japanese for Today は第1課で「は」を導入している。そこでは次のような会話文 (p.10) を提示する、

これは花です。さくらです。

それはももです。

あれはばらです。

この会話文中に使われた「は」に対してつぎのような説明を与えている。

Wa is a Particle indicating that the Noun to which it is attached is the Topic of the sentence. A Topic can be anything that the speaker wants to talk about. Remember that it is

not quite the same as the 'subject' in English grammar. The essential function of **wa** is to attract the listener's attention to the word or phrase to which it is attached. (p.15. ゴチックは著者)

文法説明は、最後の1文を除けば、妥当である。学習者への注意を促している箇所も首肯できるものであるが、上の会話文との協働が円滑ではなかったようである。会話文では、「これ」「それ」「あれ」がそれぞれ「花」「もも」「ばら」に結びついていて、前3者は「主語」であると受け取られても仕方あるまい。このような誤解が、「は」と「が」の識別に混乱をもたらすことは言うまでもない。

An introduction to Modern Japanese でも第1課で導入している。まず、次のような会話文を示す (p.2)。

Passenger: いま何時ですか。」

Stewardess: 六時です。

P: 東京はいま何時ですか。

S: 八時です。

P: 午後八時ですか。

S: ええ、そうです。東京はいまよるです。

ここでは、「東京はいま何時ですか」と「東京はいまよるです」の2箇所「は」が使われている。この「は」に対して次のような説明を与えている。

Wa follows the topic that the speaker wants to talk about. Here, the topic that the speaker wishes to emphasize is 'Tokyo,' so he starts his sentence with Tookyoo-wa. To find out what time it is in New York he would say *Nyuuuyooku-wa nanji-desuka*. (p.4. イタリックは著者)

「東京はいま何時ですか」という文の英語

訳は、「What time is it now in Tokyo?」となっており、「Tokyo」は主格ではなく斜格として扱われている。こうした説明を与えられた英語話者である日本語学習者は、「は」に先立つ名詞を主格と解釈する危険を免れている。「は」が文の主題を表すという働きを、なんら混乱することなく把握できたと言えるだろう。

本教科書では後者の立場をとった。以下の会話の中で「は」を導入した。

P: Pasuta tabemasu ka?

Q: Ee.

P: Sarada wa?

Q: Sarada wa tabemasen.

「サラダ」は「食べる」という動作の対象であることは明らかである。「サラダ」が「食べる」に対して取り結ぶ関係は対格である。主格以外の名詞が「文の主題」となりうることを、上の会話は示している。このことを理解させた上であれば、直後に続く次のような会話も混乱をきたさないだろう。

P: Sumimasen. Toire, doko desu ka?

Q: Toire wa asoko desu.

「トイレ、どこですか」と尋ねて「トイレ」を話題化する。この質問を受けたQは、「トイレ」を主題にすることができるから、「トイレはあそこです」のように答えることができるのである。

5.3. 話し言葉に特徴的な現象の積極的

採用

日本語教育界の中にはいまだに、書き言葉こそが「日本語」であって、話し言葉を副次的なもの、崩れたもの、という考え方を抱いている人が少なからず存在する。「リングです」の否定形を、「リングではありません」ではなく、「リングじゃありません」と提出する初級教科書がようやく増えてきたのが現状である。そのくらいに、書き言葉に規範意

識を求める考え方が支配的であった。

日本語の初学者が日本語学習に期待するのは、話せるようになることである。おそらく95%以上の人がそのような動機から日本語を学び始めている。彼らは話し言葉としての日本語を欲している。日本語教員はそのことに忠実であるべきだろう。

本教科書では、話し言葉に特徴的な現象として、音声変化の現象、感嘆詞の多用、拡大述語「……んです」の使用を取り上げる。

音声変化は随所に現れる。日本語話者である日本人が普通に変化させているのであるから、それを聞かせ、言えるようにすることが大切である。「いいえ」→「いえ」、「すみません」→「すいません」、「こちら」→「こっち」など、たくさんの種類がある。これらのペアのうちで、一つが中心的、もう一つは周辺の、という言い方はできない。二つは位相差があるだけである。親疎という言い方を使えば、「すみません」は「疎」の関係の中で、「すいません」は「親」の関係の中で生じるものである。

感嘆詞も頻出する項目である。にもかかわらず指導項目としていない教科書が多い。「あの～、その～、あっ、ちがった、ええと……」などのように、時間的に順次、出現することさえある。日本人が頻繁に発する感嘆詞を、雑音として聞き流すか、そこに感情を読み取ろうとするかは、大きな聞き手としての態度の違いとなるだろう。「へえ～」「ふ～ん」「ほっほう」などの、感情を伝える感動詞とともに、「やっぱり」「なるほど」、さらには「そうなんだ」などの相槌も提示する必要があるかもしれない。

「……んです」という形式を、Jordan (1987) は、extended predicate (拡大述語)と呼んでいる。その中で、この形式は「説明」の機能を持っているとしている。また同書は

この形式を、欲求を表す「動詞の連用形＋たい」という形式に後続するものとして提示している。たしかに、「私はコピーしたいです」という文は、自分の欲求を述べただけであるが、「コピーしたいんですが」と言えば、聞き手に対して働きかけている印象がある。この二つの違いは大きい。だが、多くの日本語教科書はこの項目に消極的である。すでに取り上げた『みんなの日本語 初級 I 本冊』全25課の中には出てこない。また、長沼メソッドによる『標準日本語読本 巻一』も同様である。An Introduction to Modern Japanese では、全30課のうちの第13課に提出されている。

Jorden (1987) では、第7課で取り上げている。前出のCMJでは第3課で導入、「頭がいたいんです」と医者に症状を訴える場面で使用している。

本教科書でも、この形式を忌避する理由がない以上、積極的に提示したい。

5.4. 隣接対の重視

語の意味は文脈が決定する、という言語学上の見方がある。これに倣えば、発話の意味は文脈によって決まる、ということができる。以前、こんな貼り紙を見たことがある。「コンピューターを使っていますから、コピーはご遠慮ください」と書いてあった。一瞬、意味がわからなかったが、しばらくして、ああ、これは電気使用量が増えればヒューズが飛ぶんだな、と納得することができた。これは状況的文脈の中に刺激文を通すことで理解が得られた例であろう。

隣同士の、互いに関連付けられた二つの発話を隣接対といい、つぎのような例が取り上げられる。

P：明日の夕方、映画を見に行きませんか。

Q：明日は残業の予定なのでちょっと。

QはPの誘いかけに関連付けて返答している状況であるから、Qの発話は拒否と解釈できる、というのが隣接対を分析する基本である。

従来の日本語教育では、一つの文に焦点を当てて、パターン・プラクティスなどの方法を用いて定着・強化を図るのが主流であった。その上で、ロールプレイなどで談話展開を学ばせることになっている。その中間にあるのが隣接対で、これを日本語の談話を習得する上での基本単位と考えて、これを口頭練習の出発点とするというのが、本教科書の姿勢である。当初は、情報要求→情報提供、つまり、疑問文→応答文という隣接対を利用し、課が進むにつれて、誘いかけ→承諾、申し出→依頼、などの多くの隣接対を学ばせることで、談話展開を容易に行える能力を身につけさせたいと考えている。

5.5. 実習との関連

3年生が中心の日本人実習生は、数人を除いて日本語教育実習や日本語教育の経験がない。ましてや、アメリカ人グループに対して英語を用いて授業を行ったなどということもない。ここに今回の実習の困難さがある。

この困難を乗り越える一つのやり方は、口頭練習問題を多く用意しておくことであると考えている。Jorden (1963) は、当時主流だったオーディオリング法を駆使した教科書で、豊富な練習問題が収録されている。この教授法は教授の役割と、ドリル・マスターと呼ばれる日本人チューターの役割が明確に区別されている。教授は英語で文法説明を行う。ドリル・マスターは多くの練習問題を矢継ぎ早に消化していく。後者は英語を話してはならない、説明してはならないとされている。このことについて同書は次のように述べている。

Ideally, there are two teachers:

under the supervision of a scientific linguist, who talks ABOUT Japanese, the student learns to speak the language in direct imitation of a tutor who is a native speaker of Japanese. (p.xv. 下線は著者)
 最初の試みとして、以上のようなやり方を取り入れて実習を行いたいと考えている。

6. 教科書の構成

以下に、第1課の内容を記しておくことにする。

14日(1日90分)の実習では、日本語という言葉を紹介するIntroductory Lessonを初めに置いて、その後、第1課～第10課までを学習対象の内容とする。これ以外にエクストラ・レッスンを設け、そこでは会話実践を行うことにしている。

<Lesson 1: Wakarimasu ka?>

I Review of the previous Lesson

1. You are the speaker Q. How do you respond to the speaker P?

(A) P: Ohayoo gozaimasu. (B) P: Arigatoo gozaimasu.

Q: _____ Q: _____

2. How do you say the following sentences in Japanese.

(A) Please listen (to me). (B) Please read (it).

(C) Please repeat(after me).

II. Dialogues

(A) P: Wakarimasu ka?

Q: Ee, wakarimasu.

(B) P: Ikimashita ka?

Q: Ee, ikimashita.

(C) P: Arimasu ka?

Q: I(i)e, arimasen.

(D) P: Denwa shimasu ka?

Q: Ee, shimasu.

(E) P: Eego, hanashimasu ka?

Q: I(i)e, wakarimasen.

(F) P: Eego, hanashimasu ka?

Q: Ee, chotto.

(G) P: Su(m)imasen. Bandoeedo, arimasu ka?

Q: Ee, arimasu.

Do you understand?

Yes, I do.

Did you go (there)?

Yes, I did.

Is there (anything)?

No, there is nothing.

Do you call (him or her)?

Yes, I do.

Do you speak English?

No, I don't understand (it).

Do you speak English?

Yes, but a little.

Excuse me. Do you have a Band-aid?

Yes, we do.

III. Vocabulary

Verbs

Wakarimasu	understand
Ikimasu	go
Arimasu	be, exist, have
Hanashimasu	speak
Denwa shimasu	call, telephone
Benkyoo shimasu	study
Kaimasu	buy
Tabemasu	eat
Nomimasu	drink
Kimasu	come
Kakimasu	write
Nemasu	sleep
Mimasu	see, look at

Language Campに向けての日本語教育の取り組み (藤原 雅憲)

Kimasu	come
Kakimasu	write
Nemasu	sleep
Mimasu	see, look at

Languages

Eego	English Language
Nihongo	Japanese Language
Furansugo	French Language
Supeingo	Spanish Language
Roshiago	Russian Language
Taigo	Thai Language
Chuugokugo	Chinese Language

Other nouns

Toire	rest room
Konbini	convenience store
Yuubinkyoku	post office
Ginkoo	bank
Kooshuudenwa	public phone
Jihanki	Vending machine
Kazegusuri	Cold medicine
Hokkairo	body warmer
Ame	candy

IV. Notes

1. A verb can be used as a complete sentence by itself.
2. Watashi 'I' or anata 'you' is not essential for a sentence.
3. A verb must be placed at the end of a sentence.
4. A verb can be preceded by a noun.
5. A question sentence can be obtained by adding the particle ka at the end of a declarative sentence. A question sentence is pronounced with a rising intonation at the position of the particle ka.
6. In answering a question in the positive, say 'ee' first and repeat the verb in the question.
7. In answering a question in the negative, say 'i(i)e' first and change the verb to the negative form.
8. The form with -mas- is called a polite form of a verb. The -mas- can be conjugated according to the tense(non-past or past) and the polarity(positive or negative).

	<u>Positive</u>	<u>Negative</u>
<u>Non-past</u>	-masu	-masen
<u>Past</u>	-mashita	-masen deshita

V. Essential tool

1. Numeral Type A: Chinese originated counting

1	2	3	4	5
ichi	ni	san	yon/shi	go
6	7	8	9	10
roku	shichi/nana	hachi	kyuu/ku	juu
11	12	14	19	20
juuichi	juuni	juushi	juuku	nijuu
30	40	70	90	100
sanjuu	yonjuu	nanajuu	kyuujuu	hyaku

V. Practice

1. Practice the following conversations, changing the verb to another one given below.

(A) P: Ikimasu ka? (B) P: Arimasu ka? (C) P: Ikimashita ka?

Q: Ee, ikimasu Q: I(i)e, arimasen. Q: I(i)e, ikimasen deshita.

- * hanashimasu, kaimasu, kimasu, mimasu *
- * nemasu, denwa shimasu, tabemasu, *
- * benkyoo shimasu, nomimasu, kakimasu *

2. Practice the following conversations, changing the noun to another one given below.

p: Toire arimasu ka.

Q: Hai, arimasu.

- * Konbini, Yuubininkyoku, jihanki *
- * Ginkoo, Kooshuudenwa *

3. Practice the following conversations, changing the noun to another one given below.

P: Bandoeedo arimasu ka.

Q: Ah, arimasen. Sumimasen.

- * kazegusuri, Hokkairo *
- * ame, *

VII. Writing system

Hiragana (1)

あ	い	う	え	お
か	き	く	け	こ

7. 今後の課題

実習は、この稿を執筆中には始まっていない。作成した教科書を実習の場で試してみ、その結果によって内容を改訂していきたい。それとともに、日本語教育実習（海外）との関係も考慮した上で、日本語教育実習のあり方を議論したいと考えている。

<謝辞> 「1. 背景」の部分は、丹羽卓教授に校閲していただきました。記して感謝いたします。

参考文献

- 海外技術者研修協会 (1974) 『日本語の基礎』海外技術者研修調査会
- Jorden, E. H. (1963). *Beginning Japanese*, Part 1. Yale University Press.
- Jorden, E. H. (1987). *Japanese: The Spoken Language*, Part 1. Yale University Press.
- Jorden, E. H. (1988). *Japanese: The Spoken*

- Language*, Part 2. Yale University Press.
- スリーエーネットワーク (1998) 『みんなの日本語 初級 I 本冊』スリーエーネットワーク
- 藤原雅憲 (1993) 「中級シラバス・デザイン」『日本語教育の方法と実践』pp.116-133, Department of Japanese Studies, National University of Singapore.
- ____ (2007) 「大学における日本語教育の基盤作り—大坪一夫の試行—」『大学における日本語教育の構築と展開』ひつじ書房
- 長沼直兄 (1950) 『標準日本語読本 巻一』長風社
- 名古屋大学総合言語センター (1983) 『A Course in Modern Japanese』名古屋大学出版会
- 名古屋大学総合言語センター (1988) 『現代日本語コース中級』名古屋大学出版会
- Mizutani, O & N. Mizutani. (1977). *Introduction to Modern Japanese*, Japan Times.
- Yoshida, Y. et al. (1973). *Japanese for Today*. Gakken Co., Ltd.